

ノイラート研究の新たな展開

——桑田学著『経済的思考の転回』によせて——

小林 純

1. はじめに

otto・ノイラート (1882-1945) の実像はなかなか描かれないままだった。彼の活動の幅が広く、図像教育活動からウィーン学団の論理経験主義の哲学、そして特異な社会化構想を含む経済思想にまでわたることも、その原因だったように思う。だがそれらは一人の人間が行なったことであり、筆者はそれらの追跡の多少の経験から「幸福学者」のラベルで全体の関連を眺望できるであろうと考えてきた。事情によりいまは作業を中断している。つい最近、その事情を言い訳にさせないほど衝撃を与えるような書が出された。桑田学氏の『経済的思考の転回 世紀転換期の統治と科学をめぐる知の系譜』(以文社、2014年)である。

これは待望の書である。そして衝撃的な書である。筆者の桑田氏が2013年3月に提出した博士学位論文「エコロジー経済学と自由主義をめぐる思想史的研究 20世紀両大戦間期における社会エネルギー論、ノイラートおよびハイエク」は、内容の一部がすでに雑誌に発表されたり研究会・学会で報告されたこともあって、関心をもつ研究者は書物の形での全容公刊を心待ちにしていた。このたびその学位論文が全面的に手を加えられて刊行されたことは、まことに喜ばしい。

以下、衝撃的な内容であることに鑑みて、その理由が伝わるように内容をやや詳しく要約紹介し、筆者の関心からではあるが、桑田氏の研究の登場の背景やその意義などについて若干記してみたい。なお要約紹介では、筆者の関心にやや引きつけた形で行うことをお赦しいただきたい。

2. 桑田学著『経済的思考の転回』

まず目次を示す。四章構成に序と結びが付されている。

序

第一章 生物経済学の源流

第二章 自然経済の理論 otto・ノイラートの経済思想

第三章 経済的統治の論法 エコノミーからカタラクシーへ

第四章 オイコノミアと自然の理法

結び

序では、本書で対象とする問題が歴史的にいかなる文脈に置かれてきた／置かれているのかが描かれる。(以下、本書の見出し句をここでは太字で表記する。)

まず<経済>の原像が問われる。人間の経済は、市場とは異質なロジックで成り立つ「他の多様な生物種を含む自然界の健全な循環と再生産」を前提に存立可能であり、ゆえ

に経済現象は社会・文化現象であると同時に物理現象でもある、と指摘される。ここから本書は、「<経済>なるものの存立条件を自然の物質的な相互依存関係にまで掘り下げてトータルに把握することを試みた経済思想の系譜」の探究を課題と定める。作業は、19世紀中葉の熱学思想の生成から世紀転換期の社会エネルギー論を追い、この系譜の議論を社会主義経済計算論争の展開過程において掘り起こすまでに至る。かくして本書は、<経済の統治>問題を上記の系譜と主流派たる経済的自由主義との織りなす緊張関係のうちに描写することとなった。

経済 = オイコノミアを自然界との物質的關係を含むものと把握する視座は古代ギリシア以来のものであった。科学史家シェイバスは、この理解が18世紀のポリティカル・エコノミーの展開中にも持続していたこと、それが19世紀に入って「経済秩序の脱自然化」の転換が生じ、J. S. ミルが「経済学」を「物理科学」から峻別して位置づけたことが決定的となり、それ以降エコノミーがもっぱら社会関係の所産として把握されるに至ったこと、を論じた。19世紀以降の経済学が古典力学をモデルに客観的・実証主義的發展をとげたが、経済現象が自然の物理的秩序の一環だという存在論的視角を欠き、物理学との類似はメタファーや方法レベルにとどまったこと、これはミロウスキーが考察したところである。

筆者は、シェイバスの考察でも抜け落ちた熱学・熱力学に発する「社会エネルギー論」に照準する。熱力学はニュートン力学を基礎とした<自然>の科学的認識に変革をもたらし、力学モデルの経済認識への根本的見直しをも迫り、経済 = エコノミーを再び自然の物理的秩序との関連で捉える視座を有したが、この問題圏の検討は手薄であったから、その掘り起こしは重要な課題である。

つづいて熱力学と経済思想の関連が取り上げられる。筆者はジョージesk = レーゲン

のエン트로ピー論を補助線に使う。一般均衡体系は可逆性に基づく「孤立して自足的で非歴史的な過程」として経済過程を把握する。力学的認識論に依る主流派経済学が時間の流れを伴う「自然資源の役割」を完全に無視することへの彼の批判は、「エネルギーの不可逆的な流れのなかで<生物種>としてのヒトが生命を享受するプロセスの全体性」にまで経済学の射程を拡張しようという問題提起であった。彼はここで古典熱力学を稼働させ、外部環境を累積的に劣化させる不可逆的過程としての経済過程を扱うのなら、経済学が普遍性をもつためには生身の身体（生物種としての人間）に立脚した「生物経済学」たならねばならぬ、と主張した。

こうした熱力学発の経済学批判がすでに「社会エネルギー論」として展開したことは、マルチネス = アリエの『エコロジー経済学』の示すところであった。19世紀中葉にニュートン力学体系から外されていた諸現象への関心が高まり、熱力学・生物進化論が登場し、生態学的思考の萌芽が見られ、この流れが力学的・機械論的自然観を揺るがし、社会エネルギー論の形成を準備した。この系譜に立つ自然科学者たちは「自然の諸力をいかに社会内部に取り込み、人間の生存と繁栄に資するよう合理的に統御できるのか」という点を、科学的な経済の統治の根本問題」と見なした。ただしこの思潮は実践的影響力をもたなかった。1960・70年代の資源・エネルギー問題の顕在化・経済学的省察により、彼らの企ての思想史的意味が初めて浮上した。

新思潮に例外的に反応したハイエクは、「科学による反革命」において、これらをサン = シモンやコントに由来する「科学主義」の系譜に位置づけ、社会主義やファシズムと同根の設計主義に結びつくもので、開かれた自由な社会への脅威だ、と厳しく批判した。ただし社会エネルギー論は多様であったから、ハイエクの批判は、社会エネルギー論系譜上

の1930年代アメリカのテクノクラート運動に見られた設計主義につながる質を含む対象には説得力をもった。

経済計算論争は大枠では自由対計画、資本主義対社会主義となったが、そこに解消されない「経済の物理的埋め込み」という視点からの自由主義批判と計画化の契機があった。議論は<経済>の統治をめぐる問題として交わされねばならなかった。

この契機を計算論争にもちこんだのがノイラートである。論争は彼の『戦時経済を通して自然経済へ』(1920年)に対するミーゼスの批判から始まり、自然計算による非市場型経済秩序構想や社会化といった社会工学的思考は自由主義陣営の標的とされた。だがノイラートは立場を変えず、利潤追求の経済や市場の純化による経済の自律と対抗して、<経済>の再生産に科学共同体と政治(=民主主義)を縦横に媒介させる統治のあり方を摸索しつづけた。それは、富と幸福の関係、未来世代の幸福、社会化と自由、統治と科学の関係への関心からのものである。計算論争の展開は市場認識の深化をもたらしたが、論争初期にあったノイラートやポランニーの抱えた「<経済>と<市場>の合理性の分裂と両者の相克という20世紀的課題」は見失われた。

この忘却によって、その後に自由主義と社会主義双方で環境汚染・破壊、生物多様性消失などの形で経済と外部領域の境界面における破局的状況が現出し、しかも主流派経済学はこの危機を市場の失敗(=価格機構の例外現象)と見るような認識論的障害に陥り、自然生態系全体の例外なき商品化・私有化を推進する、という事態が生まれた。ここに「自由対権力」の二項対立の誤りと、同時に経済的自由主義が介入と統治の枠組みとして作動してきた事実とを確認できる。この視点から計算論争を振り返ることは、自由主義的経済秩序と資源・環境問題の連関を理解するうえで大きな意味がある。

筆者は本書で、ハイエクに対抗するノイラートを解説し、<経済>の諸関係や合理性、ありべき統治の論理を検討し、『未来の歴史』への想像力に向けて自由主義やマルクス主義のヴィジョンとは異なる<経済>の一貫したパースペクティブ」の再構成を試みる。

第一章は、まず本書の基層をなす熱学思想の展開が経済認識に与えた影響を、その生成から社会エネルギー論までの諸相に立ち入って検討する。自然科学者の社会科学への越境に方法上の問題をみたハイエクはそれを「科学主義」批判として展開するが、双方に、経済学が市場の理論に狭隘化した事態を克服する「経済の統治」問題を語るべきことは了解されていた。

第一節では「力学的世界観の崩壊」から熱学思想の隆盛と社会エネルギー論の生成、およびそれと経済的思考の認識論的変容とのつながりまでを見る。

19世紀中葉の熱力学の進展、とりわけ熱力学第二法則(=エントロピー法則)の発見は、古典力学の決定論的な可逆の世界像と根本的に対立するものだった。経済社会も自然界の不可逆的变化から自律的な「永久機関」、つまり商品の生産と消費の無限反復的な連鎖(閉鎖系)とみなすことが不可能となった。古典力学モデルの経済学の枠組みができるころには、力学の覇権的地位は失われつつあった。

ハイエクがエネルギー科学の創始者と呼んだ仏の物理学者S. カルノーは、熱を巨視的な自然現象の原動力とみる汎熱的自然観をもち、社会現象にも考察を広げた。熱機関一般の理論を研究した彼は、動力/熱の変換効率の最大値は熱機関が「可逆過程」の場合のみ得られることを示したが、これは自然界における不可逆性をあぶり出すことになる。カルノー命題は彼の没後、英のジュールや独のヘルムホルツが発見した「エネルギー保存法則」

と矛盾した。力学エネルギーも熱エネルギーも同じエネルギーの二つの現象形態で相互に変換可能だが、「等価での変換」はカルノーの「熱をすべて仕事に変えることは出来ない」という命題とは食い違う。これを解いたのがドイツのクラウジウスで、彼は、熱と仕事は変換可能で、エネルギー的総和は一定であるという熱力学第一法則と、熱は高音物体から低温物体に移動するが逆はありえぬという第二法則を定式化して、熱の特殊性を明らかにした（カルノーからクラウジウスへ）。さらに彼はエネルギー変換の不可逆性を表わす物理量にエントロピーの名を与えた。これはいわば物事の無秩序さの尺度で、熱ならびに物質の拡散・劣化度の指標である。孤立系における何らかの変化はエントロピーの増大、となる。

この第二法則と経済社会の認識がどうかかわるか。クラウジウス自身、そこに社会問題に直結する熱汚染と物質汚染の問題が潜むことに自覚的であり、無尽蔵な富という幻想の源泉である永久機関の不可能性と物質文明の物理的資源的限界との類比を示した。太陽の放射熱の蓄積を利用した森林の成長という環境制約を一時的に免れているだけの人類は、次世紀には「自然から得られたエネルギー源の消費に関してある種の経済学（エコノミー）を導入すること」および再生不可能な諸資源の浪費を防ぐことが課題となる、とした。彼はエントロピー論により、そこに資本主義的工業化の拡張の本質的制約があることを指摘した。社会の存立に課された自然の物理学的制約は、以後、社会現象の科学的認識を変えてゆき、世紀転換期には社会エネルギー論が登場した。熱学の原理から社会全体の福祉の条件を考える「科学的な人間の本来的思考」が獲得した共通の視点は、経済思想の文脈でどんな意味をもったのか。

第二節では「エネルギーティック」を提唱した独の化学者オストヴァルトの自然哲学が紹

介される。背景にはマッハの感性的要素一元論や、進化論を独自に発展させたヘッケルの一元論の哲学があった。Oekologieの提唱でも知られる「一元論同盟」創始者ヘッケルを継いだ二代目会長がオストヴァルトである。彼はあらゆる現象をエネルギーの「量的不滅と質的変換」で説明できるとして、ボルツマンの力学的原子論には有効に対抗したが、エネルギーと文化理論を地続きにしてエネルギーティック（エネルギー一元論の哲学）で文化科学を基礎づけようとした。経済合理性をエネルギーの変換効率問題に解消する議論にはM. ヴェーバーが批判を加え、それをのちにハイエクが自然/社会の方法論的二元論という形に徹底した。

第三節「生命と富」からは、ジョージエスク＝レーゲンの「生物経済学」の思想的起源と目されるゲデスとソディが扱われる。生物・植物研究から始めて英国社会学会創設にも関わり社会改良・都市計画でも活躍したゲデスと、物理化学界で放射性同位元素（アイソトープ）の存在の予測と命名まで行なったソディは、急速な工業化・富の偏在・大量エネルギー消費の社会的現実をみて社会科学に越境してゆく。ジェヴォンズの『石炭問題』とラスキンの資本主義経済批判が両者に影響を与えた。

ジェヴォンズは石炭という枯渇性資源の実態を示し、代替動力源を検討した。ゲデスはそこに個人的利益と交換価値で支配される市場のみを相手とする経済学とは異なる問題意識を認め、物理的な富の根源性への着眼を市場社会の存立条件解明に決定的と受けとめた。後者のラスキンは、古典派理論が視野狭窄となり、社会成員の「健全にして幸福なる生命の維持」という政治経済学の本来の目的から逸脱していることを批判した。彼は富を対象属性の「固有の価値」と人間の「受容能力」の二重の水準で分析しようとした。ゲデスとソディにとってラスキンは自然法則の科学的

洞察に基づく経済分析をおこなった「フィジオクラートの正統な継承者」であり、模範となった。ラスキンの課題たる「生命の伸長」を受け継ぎ実現するための生物物理学の諸条件をより厳密に科学的に解明することが二人の課題だった。

第四節「生命 都市の経済学」ではゲデスの統計学とそれを基礎とした「経済学原理の分析」(1884年)の、やや複雑な内容が説明される。彼はワルラス宛書簡で経済学への数学の応用に批判的にコメントして資源のフローを扱う生物物理学的な経済学研究の可能性に言及していた。彼はのち、巨視的レベルでの社会的物質代謝の経験的記述に接近した最初の科学者と評される。外部環境との交流のなかで人間の欲求と進化を捉える視点は「環境・機能・有機体」の諸関係の分析となり、またその社会領域への適用として「場所・仕事・民衆」の形にまとめられた。彼はループレ学派の地域調査という「地域・仕事・家族」を受け継ぎ、具体的な生活が成立する基礎的単位(リージョン)としての「流域」を加えた。源流から海に注ぐ生活圈(鉱業・林業から農業・漁業まで)の可視的イメージである。ゲデスの地域主義は、歴史と自然環境の有機的な結合としての都市を構想することとなる。彼の「都市学」は、人間と場所を媒介する機能を担う労働や産業のあり方、生命の多角的豊饒化を実現するための最広義の環境的条件を創出しようとする、ある種の庭師的な都市計画や統治を指向していた。

第五節「富と負債」で扱われるソディは、1921年ノーベル化学賞受賞者で、ケインズやキットン、ゲゼルの書を読み、コールやダグラスと交流し、大戦間期の通貨改革議論に加わった。放射性元素崩壊の共同研究者だった彼は、原子核変換の人工的制御の甚大な影響の可能性に期待と懸念を抱いていたが、第一次大戦がその期待感を砕く。技術的進歩とそれを適切に制御する社会的進歩が乖離する事

態を問題にし、彼は物理学から経済学に転進し(反転する科学)、「富とエネルギーを関連づけ、富と貨幣を切り離す」作業に邁進した。熱力学原理に基礎づけられる自己の研究をデカルト派経済学と名付けたが、経済現象をエネルギー現象に還元することなく、後者と人間の自由意志と理性による行為の二領域の相互作用とみた。「普遍的に順守される物理世界の法則から全面的に引き出される真の社会哲学」がソディのエルゴソフィであり、「富」に正しい意味を回復することを課題とした。利用可能な物質とエネルギーは、その市場価値と関係なく「愛し考え、真善美を追求する」ことを可能とする必要条件としての「絶対的・実質的な富」をなすもの、とされた。実質的な富形成の本質的条件は太陽エネルギーのフローにあり、彼は、太陽エネルギー 植物界 動物界 人間社会の連鎖に注目した。光合成を基礎とする農業は経済の恒久的な基幹産業をなす。人間の営為は原子力利用にまで進むが、これは従来の自然史的過程から逸脱するものだ。こうした富の物理的把握は功利主義の主観的価値説やマルクス主義の労働価値説への批判を含意していた。

ソディはラスキンやゲゼルと同じく貨幣を「将来の富に対する社会的に合意を得た請求権」、つまりは社会が受け入れた「負債」と定義する。富の本質は「自然を支配する力」だが、貨幣の本質は「人間を支配する力」にある。「複利で増加する過程は物理学的には不可能」だが、人は利子をもたらす貨幣を望む(仮想的富、負債の法則)。実質的富は、貨幣という仮想的富に転化した時点で「死滅する肉体を捨て、不滅の肉体をまとい」、熱力学法則から免れる手段を獲得する。自然の制約に従う実質的富と数学的な量として肥大化する仮想的富とのバランスが崩れると、大規模な債務不履行や恐慌という形で社会の側に反作用が生じ、定期的再調整が必要になる。彼は物理的富と貨幣の非対称性を軽減できる

貨幣制度を求め、商業銀行の信用創造を弊害とみて百%準備率の適用や金本位制廃止、変動相場制導入を提案した。

第六節「社会エネルギー論とハイエク」では第1章のまとめと以降の論旨展開の準備がなされる。第一に確認すべきは、経済過程でのエントロピー増大則への着眼それ自体に、ニュートン力学的モデルと、それを経済現象に適用する主流経済学への批判の契機があったことである。熱力学の不可逆的自然像の視点は、自然界からのエネルギーの贈与に依存しつつもこの過程を適切に制度化できない市場社会のユートピア性と、「効用と利己心の力学」と化した自由主義的経済学の欺瞞とを弾劾していた。

第二に、彼らは家政術と自然に反した貨殖術というアリストテレス的区分を意識しており、古典的なオイコスの管理としての経済、<オイコス>の再建を目指した。社会存立の広範な物質的諸条件を対象に、それらを賢明に配置し秩序立てることで成員の生命を円滑に再生産する法・統治実践としての経済学というヴィジョンが現れた。だが彼らの科学主義=コント主義的側面が受容を妨げた。これを批判したハイエクは、そこに設計主義をみて、これを自由な社会の敵として描いた。彼のいう科学主義とは、自然科学の方法や思考習慣を社会科学に機械的・無批判的に適用する態度、理性の限界を認識しない知的態度(=理性の濫用)を指す。その「科学」の方法の特徴として客観主義、集合主義、歴史主義の三つが挙げられる。客観主義は質的現象を無視して計量可能なものに集中するものだとし、コント(社会物理学)、ワトソン(行動主義)、ノイラート(物理主義)そして一連の社会エネルギー論者が批判された。彼は、社会科学の対象は「客観的事実」ではなく、人間と人間、人間と事物の関係に関する特定の人びとの抱く信念や意見、概念を扱うのであり、経済学も諸個人が財の物理的屬性につ

いて抱く信念や観念で構成される必要がある、と説いて自然科学との方法論上の差異を強調した。

方法的二元論はヴェーバーなどにもみられるが、ハイエクはそれを経済への介入や統治様式の問題に重ね、客観主義・集合主義が経済計画や社会学という特定の体制や統治様式を正当化する機能を果たす、と指摘した。工学型の精神は「設計主義的合理主義」をもたらす主犯とされた。この「科学」による統治から自由な社会を防衛するための科学主義批判であった。

エネルギー論批判の多くは、古典力学と熱力学の間の認識論的断絶を理解せず、それを一般均衡論と一緒に科学主義に押込んで、それ以上の思考を不可能にする。ただハイエクの批判が自然・社会の科学の統一という課題につきまとう問題に触れるから無視できないことは「序」で触れておいた。

別の可能性を提起したのがノイラートである。彼は自然計算に基づく経済の合理的統御の可能性を追求したため自由主義派の集中砲火を浴びたが、その彼の経済合理性の意味の読み替えや市場・国家二分法批判、独自の合理主義批判を読み解くならば、彼は、自由主義的統治への全面的な批判を通して、ゲデスやソディとも共鳴する生態学的な相互依存関係をも視野にいれた<オイコノミア>の再建という問題を、社会化と自由、統一科学と民主主義とのきわどい緊張関係のなかで立て直そうとしていたのである(自由な社会の敵?)。

第二章「自然経済の理論」は社会主義経済計算論争から始められる(第四章で詳述)。この論争については、歴史的に以下のような標準的解釈がなされていた。

ミーゼスの社会主義批判：要点は市場価格の機能にある。資源の利用方法の選択を便益/費用の合理的計算で見積もるための計算単位だから、これを欠くと合理的な経済

運営は不可能となる。

社会主義派のパローネ援用による反批判：均衡価格の存在を数学的に証明し、連立方程式体系の計算で社会主義における計算問題の「数学的解決」をはかった。

ハイエク、ロビンソンは、問題は理論的可能性ではないとして、その実行不可能性を唱えた。それは人間の理性の限界を超える、と。

これに対してランゲは、市場の「模索過程」に類似の計算価格の改定機能を理論化し、競争的社会主義モデルをもって運用可能だとした。

1980年代に代替的解釈を提出したD・ラヴォアは、標準的解釈が新古典派とオーストリア学派の市場認識の根本的相違を見ていない、として以下の論点を出した。

まず、競争の認識について。新古典派は静学的均衡の観点から市場を説明する（完全競争を想定）が、オーストリア人は市場を「対抗的な」競争過程と見なす。「より有効な生産諸要素の結合方法について、連続的に変化する知識構造を生み出す」動態的作用の場なのだ、と。模索実験からの静学価格の提案は「代替物が提供される数値的条件」にすぎない。

つぎに、市場の対抗的性質について。市場の動態観でいえばランゲはマルクスからの後退だ。「大きな社会」は限界ある理性では制御できぬ。この論点は、ラヴォアの書の登場以降、オーストリア学派のアイデンティティとなってきた。〈模倣 = 擬似的市場の設計〉発想は、現実の市場の不均衡的・対抗的性質を度外視した机上の一般均衡論を前提にしている。

さて両派は貨幣計算を不可欠だとして市場機能の合理性を承認する。論争は「新古典派対オーストリア学派」に狭隘化した。だが1920年代の議論では、経済と民主主義、市場外部の社会的費用、自由と権力、等の論点が議

論に含まれていた。上述の整理は「市場の合理性に限定されない問題」を外す（カルーペク）ことになり、社会エネルギー論と通底する「自然の物理的秩序への経済の埋め込み」というノイラートの構想は議論から消えていった（計算論争の失われた位相）。これを浮上させよう。

ノイラートについての一般的な否定的イメージは修正される必要がある。彼の経済の原像を理解するために必要な三つの要素が挙げられる。

古代経済史と戦時経済の研究：歴史学派内での研鑽、価格形成市場以外の経済像、戦時経済博物館設置。実践活動：レーテ社会化、赤いヴィーンと住宅建設運動、ギルド社会主義、博物館・図像教育運動。ヴィーン学団：マッハやデュエム研究、機能主義批判・実験の限界（観察の理論負荷性）認識、力学的自然観・有機体論の克服。彼は、直接経験との関連で知識の究極的基礎づけを指向したシュリックやカルナップと対立した異端的存在だ。原子プロトコル言明の特権的地位を否定して「タブラ・ラーサは存在せず」とし、検証可能性による科学哲学の樹立は不可能と自覚していた。

第三節「幸福の地勢学」ではノイラートの具体的な理論内容が説明される。彼の説く「自然経済」には三水準がある。

理論経済学の一類型としての自然経済学対抽象的経済理論（理論・科学的レベル）

社会的選択の基礎としての自然計算対貨幣計算（意思決定の道具のレベル）

経済秩序の一形態としての自然経済対自由交換経済・市場経済（実践・歴史的なレベル）

は古代史研究に遡るもので、はモノの見方として当初は政治的意味合いをもたなかった。ミーゼスやハイエクは と を区別せずに扱った。

を検討しよう。彼は方法論争の余波のも

と、歴史と理論の対立の克服を考えていた。彼はマッハの「歴史的・批判的分析」を援用する。形而上学的なものとは「われわれがいかにしてそれに到達したかを忘れてしまった概念」である。資本・商品・国富・国民所得・生産要素など、貨幣経済に適合的な経済学の構造概念をいったん括弧に入れて、経済学的概念・言葉で無定形な現実の何を切り取り何を失ったかを、歴史的に省察してみる。これは「モノの見方を解放する」すぐれた理論的方法だ。これにより彼は純粋科学として自立し始めた経済学説を検討し、力学的方法の経済学への導入と、力学の影響で作られた「抽象的経済学」の基礎概念 ホモ・エコノミクスと測定可能な量 とを批判的に分析した。そこでは、とくに貨幣という単一の尺度で経済行為の合理性が測定されるという前提が「ラプラスの魔」の神話であることがはっきりした。すなわち経済科学の価格理論への狭隘化である。現実には、市場外の贈与・暴力的領有・戦争・生態学的諸条件等の変化があるのに、それらで形づくられる「富」の包括的分析を排除している。「力学的方法への信仰」と「富の諸関係が貨幣タームで正確に表現される」ことは相互補完的だ。

ノイラートは自然経済が劣った形態という認識を批判する。それは、市場経済を非市場型「自然経済」と対照される一社会制度として相対化する「比較経済学」枠の構築に向かうこと、そして、交換でなく人が生産し消費する「富」をその中心に置くこと、を意味した。彼は経済学の「家政術から貨殖術へ」の変質を問題化している。

以下、彼の独特な用語が説明される。彼は富を4つの位相に区分し、その相互関係として分析する。

生活の質：人間集団の構成員の幸福と苦痛＝効用。食べる・飲む・読むこと、美的感受性、宗教的観想、愛する・嫌悪することな

ど、あらゆる経験と接続される。

生活条件：「幸福の内的条件」、衣食住、教育、娯楽、仕事、病気、労働時間、友情、市民的自由、「大洋性の感覚」など。

生活秩序：個々人や集団を特徴づける人間の意識的無意識的な諸行為、振舞い、慣習、制度。

生活基礎：「幸福の外的条件」、最広義の環境（領土・大気・森林・土壌・資源やエネルギー供給源等生態学的）+都市・機械・運河等の人工物。

の「生活条件」の概念は、エンゲルスやル・プレーの生活実態調査からアイデアを得ていた。これについて注目しておくべきは；

第1、その内的な多元性に関して。相互に還元不可能な諸要素から成る布置関連、多次元的構造として捉えられている。社会関係の質や社会制度に関わる要素も含まれる。異質なものの全体性なのだ。所得・消費水準といった一元的測定や数量化は無意味である。

第2、経済学批判としての局面。生活を低下させる要因が考慮される。所得不平等・劣悪労働環境・ら病率・乳児死亡率・環境破壊、等。は広義の社会構造分析として行なわれねばならない。社会状態を視覚化した図像表示（ヴィーン方式/ISOTYPE）は「生活条件の輪郭、社会条件の地勢図」の記述であった。

第3、論理経験主義と経済学の関係について。ロピンスのピグー厚生経済学批判は「一般に、形而上学を否定し価値を排除し、経験的な原子的事実（プロトコル言明）にのみ視野を限定する論理実証主義」の影響とされる。だがノイラートの試みは効用の記述を形式化する厚生経済学の流れとは逆行しており、オニールやユーベルが説くようにアリストテレ

ス派の系譜に位置する。「満足の個人間比較は現実世界についての経験的判断であって、……価値判断ではない」(リトル)。彼の狙いは、規範的意味抜きの経験科学としての「生活条件の理論」, 「物質的・社会的な諸関係の変化がいかにして人びとの具体的な生のあり様に影響を及ぼすか」の分析であった。そのさい、経験的判断が価値判断を排除しきれぬことも自覚していた。社会/自然科学の方法的二元論を拒否したが、自然科学の方法が単純な実証の客観主義とは言えないのである。

フェリシトロロジーとしての経済学は、主観的経験のレベルから物質的・社会的諸関係へ、さらに物質界の物質的諸関係へと分析を進める。つまり自然経済学は、市場経済・金融理論に比して「財の自然的・物質的性質」に多く注目する。ここには生態学的相互依存関係に踏み込み、生存の再生産を思考する視点がある。これは<ユートピア>的思考だと批判もされたが、彼は「社会制度が人間の幸福に及ぼす影響を科学的に研究することは可能」だ、とした。の「人間集団は生活基礎のなかに埋め込まれ、これに規定され、これに影響を及ぼす」ことが基底にある。『経験的社会学』(1931)には、ヘッケルやオストヴァルトの影響を受けたラツェルの『人類地理学』(1882/92)への言及もあった。だが、人間の生活を、の自然環境諸条件から経済秩序(社会・文化)という中間項を介して考えるノイラートは環境決定論ではなかった。逆に(自然の経済の一貫として存立)をふまえてへ、という視座は、経済学には欠けていた。

彼の独自の経済像は生態学を取り込んでいるが、著者がとくに注目したのは、そこで、生活型を共有する種から構成される植生単位、という生態学の概念である「シヌシア(synusia)」が用いられたことである。この、経済の存立を外部環境との相互作用において捉える方法は「凝集体プログラム(aggrega-

tional program)」とも呼ばれる。ここでは主体はホモ・エコノミクスとしての人間ではありえない。現実の人間は一つの生物種であり、多様な自然事物との相互関係の中にあり、他の動植物・微生物・海洋・気候等の相互関係が織りなす共生体(生態系)としてのシヌシアに含まれるものである。

ここから科学のあり方も規定される。人間の経済についての記述・言明や制御・統治は、狭義の社会科学で完結しない。自然諸科学の知識や実践知と技術の総合、「諸科学のオーケストレーション」を通じて追求されるべきものとなる。彼は「統一科学」運動を推進したが、理論レベルの統一ではなく、経済の統治に関わる実践的役割を担うもの、とされる。これは第四章で扱われる。

1944年のテキストには、幸福を産出する要因として「大洋性の感覚」が付け加わった。これは、人間が他の動植物・自然界と共有する原基的なもの、あらゆる宗教に先立つ原初的な感覚、とされる。人間と自然の分割線が曖昧化するところに幸福・快楽の原基的位相を求めたことは、物質と精神の厳格な分離への批判の徹底であり、経験主義の人間像を獲得したエピキュリアン・ノイラートを如実に示している。

理論経済学のパースペクティブの書き換えにつながるという意味でノイラートと同様の位置にあるポランニーは、経済の実体的・実在の意味と形式的意味を見いだして比較経済論の基礎においた。交換でなく「富」に着目したノイラートと共振する。経済学に自明とされた枠の脱構築への関心が経済計算論争のなかに含まれていた。本章で見たノイラート像は、経済学の認識論的枠組みや理論的選択の幅の拡張に向かうものだったが、1918年以降の彼は、実践活動の中で、多様な経済秩序の様式(ユートピア)に向けた政治的選択の拡充という目標を背負う。

第三章 経済的統治の論法

ノイラートは、ヨーゼフ・ポパー=リンコイスの『社会問題を解決するものとしての一般的扶養義務』(1912)の影響を受け、その平等主義的社会計画を受け継ぎ、普遍的統計を基礎に自然経済の可能性を探った。ここに「自然計算」が採用される。彼の経済計画は、ブレンターノやマルクス主義者、ミーゼスら各派からの批判を受けた。論点は、経済体制選択や価格決定機構と同時に、自由の問題に直結していた(科学的ユートピアの実践)。

ミーゼス(1920/1922)はノイラートの実物タームによる合理的な経済計算の可能性を否定した(序、第二章)。生産財市場のない社会主義では基数的価格での経済計算は不可能となる。自然計算は消費財にのみ可能だが高次財では無理だから社会主義に経済計算はなく、経済は存在しえない、とした。彼は実践的にはノイラートとオストロ=マルクス主義を批判しており、ここでは市場社会主義モデルは想定外だった。客観的交換価値としての均衡価格が達成されるなら批判は論破される、という論理形式をとっていた。

ヴェーバーの批判(『経済と社会』第2章)も同形である。彼は「形式合理性対実質合理性」という原理的対抗を示し、貨幣計算こそ形式合理性を最高度に高めるが自然計算はこれを欠くから合理的経済は不可能だ、とした。

社会主義派の反論は、パレートの弟子パローネ(1908)の援用でなされた。彼は需給均衡に関する連立方程式により均衡価格の計算可能性を原理的に認めていた。ここから社会主義派は、中央計画局はその解により効率的資源配分を達成できる、とした。ハイエク/ロビンズはその実際の不可能性を指摘したが、ランゲ/ラーナーは、まずは市場=効率的システムを承認し、ついで模索過程 試行錯誤法の導入により難点を克服した、と考えた。つまり一般均衡理論の難点である「セリ人非在」は中央局で克服でき、パレート最適命題

は社会主義でこそ現実となる、とした。論争の帰結は、市場と計画を計算次元でのみ扱うという経済計画議論の狭隘化だった(計算合理性への純化)。一般均衡論の市場理解を現実の市場・社会と同一視することで成り立つ議論であった。

ハイエクはミーゼス1920年論文の未整理部分を精緻化し「社会工学」の原理的批判へ向かった。最初の成果「経済学と知識」(1937)で彼は、均衡過程はどう達成されるかを分析し、均衡論の依拠した知識に関する前提を覆した。彼は知識の分有・分業のあり方から、市場における動的競争的過程は静態的均衡状態とは異なり、体系的制御に必要な知識を統治者に集中などできないがゆえに、社会主義は実現不可能だ、とした。社会工学は、既知の数量・技術的問題を扱えばよいという工学型の精神の得意とする技術的最適化にはまわっているが、現実には個々人のニーズや福祉は多様で共通尺度がない(社会工学の陥穽)として、「一般的福祉・普遍的利害」の虚偽性を暴くのがあった。

ここでハイエクは、計算合理性・工学的問題から知識論・認識論の問題へと経済問題の視点を転換した。これが彼の自由市場擁護論の骨子となる。自由主義の問題構制は、経済問題の核心を「分業社会で共約不可能な知識・価値をもつ人間が互いの目的に合意せず強制もなしに協力できることがいかに可能か、その社会的制度的条件は？」に置く。ハイエクは「無知」を、個々の経済主体の経済全体に対する一般的盲目性と、経済的主権者の経済過程の全体性に対する不可視性・盲目性とに分けて考える。「近代社会が、その複雑性・不確実性にもかかわらず維持されるのはなぜか、それを支えるのは何か」と問うて、「慣習・伝統・法のルールに支えられて出現する市場の『自生的秩序』の存在」と答えた。ハイエクの市場擁護は、「大きな社会」の経済問題に対処可能な統治の機能を備えるがゆ

え、であった。一定のルールを前提とする市場の秩序は、分散する知識の集中・統合なしに社会的協力を可能にする、と。

ここで市場評価のポイントを整理しよう。

断片的局所的知識の利用はその「人に特定の意思決定を委ね……（その人に固有な）特定環境の有効な利用を可能にするような、一般的状況についての情報を与えてくれるメカニズムによる」が、市場がその機能を担う。

このことは、市場が目的や知識の多様性を背景に社会的協同および行為の相互調整を可能にするシステムであることを意味する。複雑な「大きな社会」では共通の目的を前提とした計画は秩序形成の基礎たりえない。価格メカニズムの機能が必須となる。

そしてこの市場観から、「統治・行政」の役割は、この市場社会の合理性を円滑化させること、国家の役割は、一般的ルールの整備・維持に制限される、と結論づけられ、

立法者の任務は特定の秩序の設計ではなく、秩序ある配置がなされ絶えず更新される諸条件をつくること、となる。統治の本質的目標は、自然的自生的な調整を可能にするメタレベルの調整であり、これは決して自由放任主義の擁護とはならない。

以上のようなハイエクの自由放任主義批判は大戦間期の経験に由来する。1920年代には市場機能の毀損、介入主義・計画経済の思潮強化がみられ、これに自由放任主義は対処できないでいた。新自由主義は自由主義的経済秩序を立て直す試みとして登場したのである。独占化・計画化の事態を招いた原因は19世紀型の自由放任主義にある。それは国家の役割を精査できなかった。現実には市場を制約すべき地点を理解する必要があり、その点においてオイケンたち「オールド自由主義」の貢献が認められる。彼らは、市場秩序が「自然な」経済的実体ではなく、秩序創設に向けた公権力の積極的介入で構成・維持されることを認識していた。

ここに重要な論点がある。完全競争は完全な形で到達可能であるわけではなく、むしろ能動的な公権力介入を必要とする目標に正当性を与えるものと位置づけ直された。国家と市場経済は相互にその存在を前提するものである。こうして「積極的自由主義」「自由主義左派」「社会的自由主義」「建設的自由主義」などの諸版が登場した。みな、自由な市場と両立する国家権力・介入の再定義、市場・国家・社会の関係の問い直しという課題を認識している。ハイエクも同じであり、彼の論法は市場対権力、人為対自然の二項対立とは異質な思考に支えられていた。

とはいえ彼は市場順応的な介入に限定し、市場主義的性格は強い。市場秩序をオイコノミア（家政術）とは異なる原理で作動するものと定義して、アリストテレスの経済の評価を反転させた。彼は「カタラクシー」の語を、市場を「経済」から区別するための言葉として用いた。市場というコスモスは「別々な構成員すべての公約数をもたない諸目的の多様性に貢献する」ものであり、市場秩序は善く生きるための物質的諸条件を提供することを目的としたオイコノミアではありえない（エコノミーとカタラクシー）、と。エコノミーは「統一的な目的ヒエラルヒー」に基づいてデザインされた計画的な「組織」だ。カタラクシーとしての市場秩序の利点は、特定の善や倫理的目的の負荷がないところにある。この負荷なきがゆえに、経済行為の評価基準は多元化し、結果として多種多様な生を許容できる。

彼の議論はもう一段階進む。まず彼は、アリストテレスの家政概念が社会主義の目的論的な設計主義を根底で支えている、とした。社会工学の試みは、手段関連的秩序たるカタラクシーを目的秩序たるエコノミーに置き換えるものだ。それは、人びとが自由に自らの生を追求する制度的条件の破壊を意味する。「オイコノミア」の本来の意味をラスキン、

ゲデス、ソディらは回復しようとしたのに対して、ハイエクはそれを削ぎ落としにかかる。エコノミーは形式化し、ニーズの充足という単一目的との関係で効率的に管理されるだけの taxis (意図的秩序) に形式化された。

ハイエクの、物質的手段の供給という目的に一元化され多元的価値の共存する余地なき領域、というエコノミー観には、ハナ・アーレントの生物学的な生命 (zoe) を特徴づける自然必然性に支配された「家政」の膨張としての「社会」という見方が対置されよう。両者は、個々人が大規模な家族の一員のように同一の利害をもつ存在として画一化される生物学的な生の領域のもの、との認識で共通面をもつ。両者の分岐は、アーレントが共約不可能な生の唯一性と自由の実現を政治的なものの復権に求めるのに対し、ハイエクは家政 = 経済とは原理的に区別された「市場」という競争のアリーナに自由の根拠を見て、それを政治的なものからできるだけ遠ざけた、という点である。

さてノイラートも同様に市場と経済を原理的に分ける。計算 = 形式合理性が市場の原理であるとして、回復されるべきは、市場の形式に還元されない人間の必要や欲求の多面性だ。彼はマテリアルな次元の再生産としての <経済> の意味を捉えていた。彼の社会工学は、物質的な相互依存関係における人間の生存を対象とした「オイコノミア」の統治という実践の領域に関わる。これはランゲたちの一般均衡の枠よりハイエクに重なるが、ハイエクとは逆向きの仕方ですべて政治・科学・経済の関係を問うてゆく。

第四章 オイコノミアと自然の理法

第三章の整理・復習をかねて、J. オニール (1998) の卓抜な図式を使おう。彼は、計算論争で問われたのは2つの異質な問題、共約可能性不在下の合理的行為・意思決定の可能性、知識の分業の状況での行為の相互

調整、だとする。ハイエクは、貨幣計算から認識論的問題へ、つまり分散された知識を生かす「社会制度としての市場」へと問題を転換した。狭義の計算問題からの逸脱はハイエク (第三章) もノイラート (第二章) も同じだが、ハイエクは一般均衡理論の合理性では市場の本質的機能は正当化できない、と計算可能性を否定した。ノイラートは、経済の合理性を計算可能性と短絡させること、つまり社会的選択肢間の技術的計算可能性を否定した。図式化すると、 $\langle \text{ミーゼス} = \text{ハイエク} \text{ 対 } \text{ノイラート} = \text{ランゲ} \rangle$ 、 $\langle \text{ミーゼス} = \text{ランゲ} \text{ 対 } \text{ノイラート} = \text{ハイエク} \rangle$ となる。

本章の課題は、ノイラートの問題を自然生態系との物質的諸関係を含む「オイコノミアの統治」の視点で検討することである。彼の課題は、自然経済の再建 (第二章)、多様な生き方の総合であり、これは狭義の経済問題を超える。まず、合理主義批判を手がかりにハイエクとの接点をさぐる。旧来のノイラート像は、デカルト派合理主義・ヴィーン学団の論理実証主義・物理主義の人、というものだった。啓蒙に発する近代合理主義の極北ゆえの表見的奇異さばかりが言われたが、実像回復の手がかりに「デカルトの迷子と予備的動機」(1913) を取り上げよう。

彼は、理性の限界を認識できるのが合理主義の強みだとして、それができない似非合理主義を批判した。だから、反証主義やテクノクラート・市場社会主義者は似非合理主義批判の対象とされる。これはハイエクの反合理主義精神に近似し、実際、彼はハイエクの科学主義批判に関心を寄せ、自己の合理主義にそれが当たらぬことを強調した。ここには、反合理主義は市場秩序だけを正当化するのではなく、社会化と計画に基づく別の経済秩序も支持しうる、という含意が読める。

さて、ノイラートは <経済> の合理性をどう捉えたか。彼の思考を整理しておく。

前提：人間は、社会的存在者、また「地質

学的主体」でもある（第二章二）。

経済も自然事物と関連して存立するがゆえに、経済の統治様式に関してミーゼスらの社会主義批判は不当である（貨幣計算への視野狭窄）。

それゆえ「経済計画における自然計算が経済合理性の社会主義的計算の基礎でなければならない」は堅持する。

経済を構成するものの複雑性の認識は市場・貨幣計算の合理性の問い直しへと向かう。収益性基準の専一的支配は、具体を抽象にねじ込み、人間の生存基盤の破壊（資源枯渇・環境破壊）を引き起こした。

「これらがもたらすひとの生存にとっての実質的な帰結を評価することはできない」。

経済過程は物質・エネルギーの通時的配分の要素を含む。貨幣計算・市場がその効率性を担保することはできない。「市場は世代間の連帯や共同性の基盤を掘り崩す」。収益性と経済性：もうひとつの合理性が見逃されてきた。物質的に有限な資源の通時的配分問題は自然計算に基づく経済計画・社会工学を要請した。収益性とはいかに儲けるかだが、自然計算での経済性とは、ヨリ実質的な価値や目的に関わる。つまり「いかにして地上の人間の生存条件を認識しそれらを持続可能な仕方では生産・再生産させるか」に関わっての合理性を備える。

ここに形式合理性を超える次元が明確化する。ミーゼスもこのことを認識し、交換領域外の財には貨幣計算の適用範囲を拡張できないとしたが、例外的な言及だった。ここで、ポランニーとK. W. カップ（1910-1976）という実質経済学の系譜に目を向けてみる。カップの「社会的費用」論は、新古典派の「市場の失敗」（資源最適配分の非効率性）とは異なる。彼は、経済を閉鎖的・自律の体系でなく「開かれた体系」とみており、市場外の現象を排除して経済政策の妥当な基準は得られぬとして、実質合理性としての経済合理性

を希求した。

この実質合理的な経済計算とは価格でなく実物タームによる計算の必要性に訴える。実質合理性概念の系譜はどこから来たのか。まずヴェブレンを介してプラグマティズムの伝統に、次いでポランニーが注目したカール・メンガー『原理』第2版にたどることができるが、ヴェーバーを通じてノイラートの自然計算に求めることも可能だ。〈経済〉の実質的／形式的意味の区別という観点は異端派の重要な論点をなす。

ノイラートの「計画」にとって経済問題の本質は、相互に還元不可能な要素間調整を含む「多中心的」調整問題にある。そこでは計算単位は不在だ。それゆえの自然計算だが、それでは形式（計算）合理性を欠くことになる。だから「経済性」は実質合理性の次元で理解するしかない。この場合に彼は、科学・理性が社会的最適を発見することを否定した。これはハイエクが新古典派の力学的均衡概念から距離をとったことに重なる。こうして狭義の「計算」からより広い社会制度の配置を通じた「統治」へと照準が移行する。そこでハイエクは、解決をカタラクシーなる匿名性の高い非人格的な市場プロセスに委ねた。対してノイラートは、民主的討議や論証（具体的・人格の意味を帯びた社会的プロセス）を通じて対処すべき、とした。経済計画の枠組みに関する判断や決定は真の合理主義を支える「予備的動機」でしか正当化できないからである。経済問題は技術・工学的問題ではなく、習慣や文化、政治との幅広い関係のなかに位置づくべきものだ。両者の関係をオニールは「ハイエクの非討議的モデル対ノイラートの討議的モデル」とした。

では「社会工学」や「統一科学」は経済の統治においてはどう位置づけられるのか。ノイラートは「科学的態度と社会的連帯は共にある」とする。例えば「完全なる有用化」という観点は「モノの使用価値を人間の幸福に

結びつけて完全に引き出すこと」を意味するが、そこから、ニーズ充足を目的とした消費を基準に生産や労働時間の調整の必要性が指摘され、生産される財の耐久性や生産技術の質を一定の科学的見地から評価し管理する科学者・技術者のアソシエーションの役割が強調される。だがそのことは、管理の思想ではなく、科学者・技術者はどの計画が採用・実施されるかの決定権をもたない。特定の専門技術的知識やその判断には内的な限界があるから、とされる。

ノイラートは社会の合目的な設計を限界づける要因として、社会を物理的・原子的要素に還元することの不可能性、科学的知識は社会・歴史的文脈に埋め込まれている、

予測がもつ現象への影響（オイディプス効果）、という、ハイエクの強調する「知識の予測不可能性」と重なる指摘を行なう。「合理主義者」のレッテルを剥がしたノイラートは、「船の譬え」で表現されるholisticで歴史的に進化する知識像の参照を求める人物だ。哲学者クワインの紹介で有名になった「ノイラートの船」とは、ラプラスの魔の否定である。荒波の海上でドックに戻ることができぬ船体を手持ち材料で修理するから形は変化するし、船員が目的地を探す。科学的知識は社会的・歴史的・集団的な過程の中で進化する。このメタファーは社会の外側に立ちこれを制御する知識の破壊者たらんとする反合理主義的知識像を示す。

これは統一科学運動に対しても言える。それは論理経験主義への脅威となるような矛盾なき科学体系構築のプログラムでない。つまり、エネルギーや科学的ピラミッド主義、物理学還元主義の否定である。「百科全書」が彼の統一科学のモデルとなる。それは不断に変動する「知の暫定的な集積」、多様な仕方の結合が可能な多くの科学的ユニットの集積体だ。彼はこれを「諸科学のオーケストラレーション」と表現し、社会変革の手段と

して科学的知識の横の連帯を図った。例えば農業なら、要素的個別資源の知識のほか、生物学とその技術など総合的知識の動員が求められる。経済は自然的条件に埋め込まれているから、そこに純粋な経済的現象などなく、熱力学・生化学的過程が同時に展開する。

そうした経済の統治には「連結可能で、論理的に両立可能なあらゆる諸法則のストック」として統一された全体知が要請される。科学的知識の協働は、自然界の相互依存関係も含むいわば<シヌシア>の統治という実践の認識論的条件なのである。

ノイラートの「自然計算と統一科学運動を通じた知識の社会的協働」は、カタラクシーとしての市場秩序を擁護するハイエクへの対抗的社会構想であり、ミーゼスへの反批判であった。ポランニーの中央計画批判も同様である。彼は、『闘争』誌の1925年論文で扱ったÜbersicht問題で統計がモノの一面しか捉えないことを論じた。また分権的組織の役割を評価し、内から外へ向かう労働者の内発的発展が社会の民主的監視能力を構成する、とした。自発的アソシエーションは協同組合原理・対等者の結合の原理に基づくとする見方をギルド社会主義に学んでいる。これは、資本主義的自由市場と市場なき社会主義的集産主義的国家社会主義の双方との相違点をなす。生産者ギルド・消費者アソシエーション・コミュニティの機能集団で構成される社会制度の構想である。この機能的社会主義は、経済問題が経済的領域のみならず社会的・政治的領域との相互関係において、複数の機能的諸組織に基づく多元的な意思決定過程によって分権的に決定される可能性を提起した。ポランニーは分権的非市場型の経済秩序の可能性を追求したが、ノイラートは知識問題よりも生き方の多様性の視点からそれを求めた。

自然経済は制度的問題として論じられたが、ではノイラートのいう「社会の制度的秩序」としての自然経済とは何であり、そこで自由

はいかに論じられたか。

彼は「自然経済」を実現する経済制度を「行政的経済」と呼んだ。これは集権的指令経済と見られてきたが、彼の構想は、自由/計画、分権/集権、集産主義/個人主義という二項対立的思考を受け付けない複雑な性格をもつ。彼の用語法によれば、

- ・社会化：Sozialisierung = 資源採取から消費までの経済過程の社会的制御
- ・国有化：Vergesellschaftung = 生産手段の法的な所有関係の変革

したがって行政的経済 Verwaltungswirtschaft は国家社会主義ではない。行政は国家に吸収しつくされないのだから。彼は経済的寛容を求める。これは市場の不寛容への批判であり、生き方の多様性の尊重である。資本主義的市場は人びとの間に「敵対者間の民主主義」の関係をつくる。市場の論理が他の社会領域に浸透し、生活や労働の様式、労働時間を均質化・同質化する傾向をもつ。これに抗して貨幣を価値判断基準とする生き方の均質化を社会化で変更することにより、人間の尊厳・生き方の多様性の実現に向かう。共同体・ギルド等の諸社会形象は世界諸地域の歴史段階を特徴づけ、共存も可能で、諸人間類型に即した満足を生み出すものだ。斉一な社会主義でなく文明の差異を正当に認めよう。こうしたノイラートの主張は、多様な非資本主義的経済組織の保護・育成・積極的共存、非資本主義的な生活様式の涵養を通じて「単純な多数決から経済諸形態の共存を可能にする経済的寛容へ」の移行を目指していた。そのためには、生産・消費の統合、農業・工業の結合強化、都市・農村の再統合のため経済計画による経済過程の枠付けや小規模団体の自律性の確保は必要だが、意思決定の集権化は不要とされた。

社会化にとっては経済計画に即した多様な「生活条件」の分配が本質的とされる。それは計画の指示に沿った「生活基礎」の利用を

前提とする。普遍的統計に基づく物質とエネルギーのフローの統一的把握が担保される必要がある。だが計画の詳細が万人に知られていることは必要ではない。計画からの逸脱回避と不足補償があれば充分だ。そこで社会化にとっては、伝統的ギルドや共同的組織、農村共同体を解体させずに経済計画の大枠にどう取り込むかが課題となる。ここには「古代経済史」の観点(=自然計算ベースの自然経済が高度で複雑な文化をなす)が生かされた。こうした立場からは、前近代的社会関係や複雑な所有関係を一掃する自由放任政策も、社会主義的「大経営と国有化」指向も、共に批判される。彼は幸福の内的条件に関して、「仕事における生のあり様は、消費財とともに生活条件の構成要素」だとした。これが「一国一工場体制」論者とすられたノイラートだ。彼はギルド社会主義についても、それが計画の単位を国民国家に縛り付けすぎだと批判し、越境的組織形成の可能性を摸索した。

ノイラートは「自由のための国際的計画」(1942)で、自由を「諸行為の一定の多様性と不均衡によって特徴づけられる、気質(習慣)やふるまいの様式」とし、国家・社会・世界がこの自由のパターンをどう産出できるのかを問うた。自由は諸集団の魂の争奪戦場裏で「各成員が複数の忠誠心をもつことが認められている事実」に表れる。他のすべてをのみ込む唯一の忠誠への強い傾向(monism)は自由の敵対物となる。契約関係と市場規範の外延・内包伸長は国家権力の強化を伴って生じたではないか。彼のこの指摘はハイエク式二者択一への批判となる。貨幣秩序の全面化の中から独裁が生まれる可能性に言及していた(モニズムへの対抗)。ハイエクは「市場の自由対計画」を誇張する。ノイラートは実物計算での計画と分権的意思決定による「生活基礎 生活条件」の構想を示して「多様な生き方のオーケストレーション」の研究

が必要だと説いた。それは自由の生産のためであった。自由とは、計画された諸制度に支えられた可能なる生き方の多様性にほかならない。彼の国際的社会秩序のイメージは、中世欧州の分権的・多元的制度構造の *societas societatum* であった。そこから「主要な自然資源の管理に責任を持つ国際組織」の設立が要請された。機能的計画ユニットに基づく基礎的生活資料の社会的制御は、ハイエクの望む「人びとが最も重要だと考えることを追求する自由」を確保し創造するための基底的社会条件なのだ。ビジネスの効率性で自由の効率を量るのではなく、自由を生産する能力で社会秩序・制度を評価すべきなのである。

経済計算論争では「手段の希少性」(ロビンズ)としての合理的選択とは異質な問題も論じられたこと、ハイエクの社会学批判が社会主義の統治合理性の限界を指摘して自由主義的統治様式の原理を彫琢したこと、を見た。ハイエクの思考は、市場社会主義やアプリオリな前提から演繹された人間行為学(ミーゼス)からも乖離するものであった。ノイラートやポランニーも別の問題の立て方をした。つまり「社会的物質的な生活条件をいかにして持続可能な仕方生産・再生産できるか」を経済問題の核心におき、「失業・貧困による生活条件の剥奪や資源枯渇・自然破壊の社会問題」を形式合理性の支配として分析した。これはポランニーやカップにつながる「実質経済学」のコアを形成していた。

高度な知識を前提とする社会学が物質生活の組織化に関与せざるを得ないことの認識から、ノイラートは、自由の生産・自由な生き方のオーケストレーションの実現にはどんな条件が必要か、という問題を立てて(社会化と自由の生産)、以下のように答えた。

経済の基礎部分の社会化。これは「一般的扶養義務」による困窮と強制からの自由を掲げたポッパー＝リンコイスのユートピア思想を引継いでいた。彼はここで、経済的

安定・窮乏除去で可能となる経済外的領域での個々人の自由な創意による文化発展に期待を寄せた。

科学者・技術者の役割の制限。彼は必然論・決定論を排し、地上に留まりつつ多様な未来の意識的醸成にむけて努力することを「科学的ユートピア主義」と称した。それは経済組織化の方向を一定範囲に限定するが、一義的に決定づけるものではない。経済的寛容に基づく異質な生活秩序・経済様態の積極的な共存。社会学は、多様な規模や機能の自発的組織の自律性や非契約的社会関係を保護し促進する。ハイエクも自発的組織の連合は重視したが、それは市場諸力の拡張とは両立するものではなかった。計画的な維持が必要とされる。

これを「ノイラートの船」で喩えよう。
<経済> = オイコノミアの統治は、不可逆性と不確実性に満ちた広大な海を、理性による洞察の限界を引き受けながら、その形態を不断に再構築しつつ進む船の舵取りのごとくである。

結 び

本書は、世紀転換期から大戦間期の社会エネルギー論の多様性に着目し、そこから、古典力学の模像の理論体系で厳密さを誇ろうとした経済学への明確な批判が生じたことを確認した。経済の存立を外部環境との物質とエネルギーの不断の交流においてとらえる視点が存在した。この系譜上にノイラートがある。彼は、古代経済史研究/ドイツ歴史学派/反力学的認識論・方法論に学び、市場現象の分析に純化する経済学の偏狭な視圏の拡張を試みた。それは多元的でホーリスティックな視点だった。

彼は自然計算と社会化に固執し、生存基盤を価格機構に包摂しつくす経済権力への対抗を構想した。自然資源の再生産や未来世代にわたる富の分配を意識的に論じ、オイコノミ

アの再建を目指した。これはハイエクにより批判された。統一科学は還元主義であり、サン＝シモン主義の支配だ、と。ハイエクは福祉国家的介入すら全体主義・独裁に行きつく、とした。

ノイラートはハイエクに、極端な反全体主義すら間接的に全体主義を支持できる、自由主義は経済合理性を貨幣計算の合理性と等置し、収益性・生産性で経済を一元的に組織化するのではないかと反論した。そうしてここに経済的自由主義の全体主義への反転の局面を見た。

自由主義的統治の問題性が示されたのである。現状に関わらせて整理しておこう。

米のオフルスは、自由主義的経済を、自然の課す物質的制約から一時的に逃れた(と思われた)例外的時代の産物とした。この条件を欠く生態学的希少性の時代には市場を軸とする自由主義的経済体制は存立不可能となる。この見方はポランニーの「大転換」という自己調整的市場の自己崩壊という見方と重なる。

市場の形成・維持における権力の役割。強制なき社会の実現の理想は自由主義のユートピア的欺瞞である。自由と等価性がグローバル化を進め、結果として掠奪経済(自然資源の収奪)つまり市場外の暴力的統治が実践されている。近時、暴力的介入は強化拡大している。途上国での自然資源の市場化促進は、この攻撃的介入の事例である。

とから「成長と環境の両立」が承認されてきたが、自然の非合理的濫用は適正な価値評価の欠如ゆえと診断される。処方箋はなんと市場創設であった。これが利潤機会を生み、生活破壊・自然収奪を悪化させている。ミーゼスのノイラート批判の論法の再現である。

自由主義は自己の正統性を「経済の維持・発展」に見てきた(=市場の自由!)。だから自由主義においても国家全体が生産組

織・経営体になる事態がある。自由対権力でなく、市場形成に向けた介入や権力の性質に注目し、自由主義の介入的側面を批判的に捉えねばならない。

「エコロジー的統治性」の出現。資源収奪などのグローバルな現代経済と環境の複合的危機の出来は、その統治権力を要請している。

社会の基盤たる自然界にまで及ぶ統治実践の両義性。そこには以下の点が挙げられる。

- i. 人間の物質的生存の必要が保証される場を維持する方向。
- ii. ハイエクの批判する科学主義・設計主義にすり替わる可能性。
- iii. しかものごとく介入主義は市場制限として機能するわけではない、という逆説。

ここから結論的に、第1. <自由と計画>の関係も<市場と自由>の関係も自明ではないこと、第2. モノと人間の関係を含む経済世界の複雑な成り立ちの根本的な再考の要請、が明らかとなる。

経済計算論争はジョージesk＝レーゲンの提起にみられるような経済の基底的存立条件を含む広義のパスpekティブのなかで論じ直される必要がある。ノイラートの「自由な生き方のオーケストレーション」は上記

i を追求した。統治の両義性を踏まえた「生物種としての人間」の自由とその条件の議論の要請に応えた事例であった。

3. 桑田氏の研究をめぐる若干のコメント

(1) この研究の登場の背景

熱学・熱力学思想が経済認識に与えた影響については「序」で触れた研究があるものの、それがジョージesk＝レーゲンに関する領域の外にまで及んでいるとは言い難い状況にある。したがって桑田氏が社会エネルギー論の系譜を掘り起こし、しかもそれを経済計算

論争の解釈史に重ねて示したことは、経済思想史の重大な欠落部分を誰の目にも明らかにしたという意味で、まことに大きな貢献である。本書が明らかにしたノイラートの実像描写には、問題とすべき論点がうまく重ねられている。

環境経済学研究から出発した著者はマルチネス＝アリエの『エコロジー＝経済学』の内容に精通していたとはいえ、そこに登場しているノイラートに焦点を合わせる必然性はとくになかったであろう。マルチネス＝アリエにはソディヤパロットにはやや立ち入った研究はある。見事に鉅脈を掘り当てた、との感もある。ただ、ノイラート研究の分野では、とくにJ. オニールがアリストテレス派経済学の立場から勢力的に研究を進め、ノイラートのエコロジー的視点を評価しており、公共的規範論に深くコミットしていたから、著者の関心の視野に入ったであろうことは偶然ではないはずである。ただ日本では、直接オニールの下で学んだ鈴木英規氏の『「通約不可能性」で「計算論争」を再考する』（『経済理論』43/1, 2006）が例外的にあるのみだった。

ノイラート研究の分野では、ヴィーン学団研究所が彼の著作を英語で刊行する作業を進め、積極的にアクセスの便をはかってきている。叢書「ヴィーン学団コレクション」の第1巻は、*Empiricism and Sociology* (1973)であった。1983年に第16巻として、*Philosophical Papers 1913 1946*が出たあと、ユーベルのふんばりでようやく2004年に第23巻として *Selected Economic Writings* が出され、これを記念したシンポジウム (2005年) の記録として *Otto Neurath's Economics in Context* (ヴィーン学団年報, 2007) も出版された。ノイラートは渡英後には英語で書いているから、ドイツ語という参入障壁は格段に低くなった。いまでは古典と言えそうな、フレックの学位論文も *Otto Neurath: Philosophy Between Science and Politics* (Cart-

wright, Cat, Fleck and Uebel, 1996) に英語で収められた。ノイラート研究の世界的認知度が高まったことは、ウェブサイト *Stanford Encyclopedia of Philosophy* に以前はなかったノイラートの項 (Jordy Cat) が出たことにも歴然と示される。1990年代にはユーベルの研究以外はあまり認知度が高くなかったことを思うと、隔世の感がある。ただ、エリック・グリマー＝ソーレム氏から2002年にうけたe Mailには、筆者以外の受信人に Cartwright, J. Cat, R. Swedbergらの名前があり、そこから彼らの交流の広さと同時に、ノイラート研究の認知が進んでいたことがうかがえた。

資料の整備も進み、ヴィーン学団財団は所蔵するシュリックとノイラートの遺品リストを公開している。ノイラートの部分はオーストリア国立図書館文書館部門 (ヴィーン) と北オランダ文書館分室 (ハールレム) で利用できるが、後者の開館は週二日のみ、また両方ともパソコンと鉛筆持ち込みのみの許可で、手作業を要する。前者の遺品利用者リストに名前のある少数の方たちのノイラート研究書がこの4、5年で何冊が出版された。環境経済学の文脈での扱いに筆者は暗いが、桑田氏の本書もノイラート研究のこうした隆盛の流れのなかにあるものだ。日本での認知度は格段に低いので、本書の内容は衝撃的とも言えるだろう。

(2) 本書のメリット

言うまでもなくノイラートの<経済>思想の全貌を明らかにしたこと、これが本書のメリットである。経済思想史に少しでも通じた読者であれば、まずは戸惑いを覚えよう。それだけ知られていなかったということだ。これはミーゼスとハイエクのせいでもある。その一面的な「計画対自由」図式が、どういうわけか目くらし以上の効果を発揮して、人びとの実践的・理論的感受性を大きく縮減し

てきた。

著者はこのことを自覚させる理論的構制として<経済>の統治を全面に掲げた。これも本書のメリットである。1979年のフーコーの講義録『生政治の誕生』(2004)の邦訳は2008年に出されたが、そこでも新自由主義の統治について論じられていた。いや、ポリティカル・エコノミーの生成局面を扱うスコットランド啓蒙研究でもこれは中心論点であった。要素はあちこちに在ったのだ。それが、ポランニーやカップの実質的経済学・環境経済学を社会エネルギー論の系譜と関連させることで「ハイエクとノイラート」対照の枠として結晶化した。こうなると「結び」で紹介した現実局面に切り込む場合の諸視点を、<経済>思想史の様々な論理で武装することが行ないやすくなる。日本の経済学史学会が創設60年の記念事業に『古典から読み解く経済思想史』(2012)を出版したが、本書がノイラートの自然経済学の思考を統治の観点から扱ってその現代的意義を浮き彫りにしたことは、その記念事業に比肩する研究の前線に位置するものである。

(3) 桑田本へのいくつかの注文

そうであるならば、筆者には著者のハイエク評価について疑問が残る。著者はハイエクが展開した科学主義・設計主義批判の存在価値を認めている。その一点に関して、なのであるか。著者はすでに「持続可能性の規範理論の基礎 福祉・代替・資本」(『歴史と経済』No.208, 2010)において環境経済学の一端を支える新古典派理論の認識論的隘路を指摘し、そのうえで主観主義的福祉概念を介して規範理論の難題に深入りしていた。その眼をもってしてなお、のハイエク評価なのか。そうであればこそ、のハイエク評価なのか。古典派的均衡観をとらず、ミーゼスをも批判するハイエクの新オーストリア的理論なるものは無い、という事情がこの評価を分かりづ

らくしているという面はあるだろう。筆者には近時の「ハイエク産業」の隆盛が理解できぬゆえ、この蒙をひらいてもらいたく思って、こうした問題設定を試みた。次元の異なる問題だというのであれば、取り下げよう。ただハイエクの「統治」観を論理的に取り上げた著者であれば、なんらかの答が得られるのではないかと考えた次第である。

ノイラートに関しては、著者の手法によって全体像が描かれたことを評価したい。それと表裏関係になることだが、ノイラートを時系列的に追跡したとき、この像にうまく結びつかない契機も出てくると思う。本書の性格に即せば無い物ねだりとなるが、これまで言われてきたような渡英後の多元的社会評価や、マルクス主義および社会民主党との関係など、時間の経過とともに変化・深化したであろう面までは描かれなかった。ここでその必要はない、と言われることは承知のうえで。

ノイラート研究の個別点では問いたいこともあるが、ここでは一点のみ示す。筆者は「実物」の表記を採ったが著者は自然計算・自然経済とした。この邦語選択のメリット/デメリットをどう考量し判断したか、うかがってみたい。

ユートピアン・ノイラートの各種提言は、前提こそ違え、戦後世界でいくつも取り上げられ、また実践されてきた。戦後の各国・国際機関でなされたことをノイラートの側から(因果的にでなく)評価してみる、という作業もあるだろう。その手がかりとして「結び」にあえて図式化して並べた。それがノイラート研究の分野として登場する可能性を想像してみた。著者にもご一考願えればと思う。

(4) 私的感想

筆者もノイラートを追ってはきた。1920年代半ばくらいまでである。それゆえ桑田氏が1945年までを追い、見通しのきく地点にまで達して描いたことに軽い嫉妬を覚えた。だが

何よりも感心したのは、社会エネルギー論の系譜から説き起こしたこと、正確にはそれを可能にした著者の力量である。それを欠く筆者は、全面社会化構想の論理レベルがうまくつかめずにいた。第二章第三節に描かれた自然経済の三層の分析は、同所の富の四つの位相とともに、ノイラートの図式におけるキーともなる箇所である。コロンプスの卵、言われてみれば、ではあるが、そう実行できるものではない。回想をはさめば、以前ある研究会報告で桑田氏がこの四つの位相を正しく理解して紹介したとき、筆者は氏の力量を確信した。だが熱力学から解き明かされる系譜にそれが位置づくまでになることは、まったく予想していなかった。3・11後にソディのアクチュアリティを実感したことがあとがきに

記されているが、思想史を通じて現代に切り込む著者を頼もしく思う。若森みどり氏のポランニー研究に接して感じたのと似た感覚である。ポランニーとノイラートの異同検討から何が導き出せるか、これにも興味がかきたてられる。

と同時に、このノイラート研究は、著者の「余技」とされるのであろうか、という余計な心配もある。上掲論文（『歴史と経済』）ではノイラートは登場しない。論理的に昇華・消化されれば、どの素材がどの分野で用いられてもよからう。社会科学の研究にはそういう面がある。桑田氏の船出がノイラートの船として航海を続けられるようエールを送りたい。修復用の積み荷はたっぷりと用意されているようだ。